

『熱砂の王子と偽りの花嫁』

著：淡路水

ill：北沢きょう

「庸がぼくの新しい母上になるの？」

大きな目をさらに大きくさせたルトフィーに聞かれる。

「は、母上……っ!？」

母上ってなんだ、母上って。

庸がどう答えたものかと思ひ倦ねているとアズィーズが側にやってきて「そうだ」とひと言答えた。

「アズィーズ！」

文句を言おうとした矢先、アズィーズに目配せされる。黙っているということだ。

フィアンセだけでなく、新しい役柄が追加されてしまった。

母上ねえ……。

庸は頭を抱えたくなった。男の母上という微妙な言い回しに、それは合っているのか？ と疑問符で頭をいっぱいにする。

とにかくもう野となれ山となれだ。半ばやけくそまみれで無理やり笑顔を作った。

「ルトフィー、庸はどうだ？ おまえの母上になってもいいか？」

調子に乗ったようにアズィーズがルトフィーに訊ねる。

絶対さっきルトフィーのことで庸がやり込めた仕返しだ、とアズィーズを睨みつけるが彼ときたらどこ吹く風だ。

「はいっ！ うれしいです、父上！ 庸はとてもきれいでやさしいから、母上になってくれるといいです」

うれしいような、うれしくないような、複雑な気持ちになりながら庸は二人の会話を聞いている。

いったいどうしてこうなった。

この一日で、王子のフィアンセというだけでなく、子持ちにもなろうとしているとは。

設定盛り過ぎだろ、と心の中でツッコミを入れた。

けれど、ぷくぷくしたほっぺたの小さい子が笑っているのは、癒やされる。些細なことはどうでもよくなって、自然に笑顔になってしまう。

「ねえ、庸はどこからきたんですか？」

さっきまでの青ざめた顔色が今はもう頬をピンク色に上気させ、目をキラキラ輝かせてルトフィーが聞いてきた。こんな顔をされると嫌なことも全部忘れてしまいそうだ。

「日本っていう国。知ってる？」

ううん、とルトフィーが首を振る。

「どこにあるのですか？ 遠い？」

「そうだね。うーんと遠い国だよ」

「どうやって行くの？ 飛行機？」

「そう、飛行機でね」

「飛行機たくさん乗りますか？」

「うーんと乗るよ。一日以上かかっちゃうかな」

ルトフィーへそう言いながら、ここまでの道のりを思い出し、そうして隣に座っているアズィーズをちらと横目で見た。

仕事でやってきたはずが、今はこんなところにおいて、いつまでここにいるのかもわからないという有様だ。

きつと庸の視線がかなり恨みがましいものだったのだろう。アズィーズは庸の顔を見て、おかしそうに微かに唇の端を引き上げたかと思うと、涼しい顔でティーカップを持って茶を口にした。

小馬鹿にされたような態度を取られて一瞬ムツとしたものの、いまさらである。

わけのわからない設定でももういい。その生活をしまないと損だ。

とはいえ、この時間は小さい王子様のことを考えなくては。気を取り直して口を開く。

「ルトフィーは何歳？」

「五歳です」

五歳という日本ではまだ就学前だ。この年頃の子と接する機会はなかったが、思っていたよりもずっと楽しいと思えるのは自分でも意外だった。

これならルトフィーともうまくやっていけるのではないだろうか。——もちろん母親としては無理だけれど友達としてなら。

「あのね、ルトフィー。俺はまだきみの父上とは結婚できないから、お母さんにはなれないんだよ」

庸がそう言うとルトフィーはちょっぴり口をへの字にして、悲しそうな顔をする。

「そうなんですか？」

「うん。でも、ルトフィーとは仲よしでいたいと思ってる。仲よくしてくれる？」

「はい！ もちろんです！」

ルトフィーはまんまるな目を輝かせ、大きく頷く。

「ありがと。じゃあ、まずは友達になろうか。いい？」

「はいっ！」

「それじゃあ、握手してくれる？」

庸が手を差し出し、ルトフィーの小さな手を取りしっかりと握手をした。彼はさらに抱きつき庸の頬に自分の頬をくっつける。左右の頬を何度もくっつけて親愛の情を表してくれた。

「よろしくね」

そう言いながら庸は思いついたことを口にしてみた。

「——なあ、ルトフィー。ルトフィーは英語は苦手かもしれないけれど、アラビア語は俺よりも得意だろう？」

突然の庸の言葉にパチパチとまばたきをして、頷いた。

「あのさ、俺、実はこの言葉がちょーっと苦手なんだよね。だから俺にこの言葉を教えてくれないかな？」

「ぼくが？」

「そう。俺は英語はきみよりちょっとだけ得意なんだけど、ここの言葉はてんでダメでね。聞いていてわかるだろ？」

お世辞にも庸の発音は上手いとはいえないはずだ。おそらく聞く人が聞いたらあまりのぎこちなさに笑い出しそうになるだろうことはよくわかっている。

「教えてくれる？」

庸が聞くと、ルトフィーはぱあっと顔を明るくさせ、「教えます！」と元気のいい声を返す。

しかし、すぐにアズィーズが見つめていることに気づくと、はっと口を噤んでしまった。

「.....父上.....よいでしょうか？」

そうしておずおずとアズィーズに訊ねる。

「どう？ ダメかな？」

アズィーズに聞くと、彼はしばらく黙りこくった。そうしてはあ、と大きく息をつくとようやく口を開く。

「わかった。庸の発音はさすがにひどい。おまえが教えてもう少し聞けるようにしてやれ、ルトフィー」

「あなたね.....！ それはあんまりなんじゃない？」

ボロクソに言われてアズィーズを睨みつけたが、彼はというとどこ吹く風だ。

「本当のことだろう？ おまえ自身も今そう言っていたじゃないか」

ふふん、と鼻で笑われる。

「そりゃそうだけど！」

「ルトフィーに特訓してもらおうといい。さてどれだけ上達するかな」

いかにもおかしいとばかりに、くくっ、と喉を鳴らしながらアズィーズが笑う。

そんな二人の様子を見ているルトフィーはきょとんとしていた。

「ん？ どうしたの？」

「父上と庸はけんかするんですか？」

「え？」

しまった、と慌てて口を噤む。フィアンセなのにけんかなんかしてしまった。するとアズィーズは「これはね」と口を挟む。

「これは本当に仲のいい証拠なんだよ、ルトフィー」

「そうなんですか」

「ああ。こうやってお互い意見を言い合えるというのは本当に仲がよくないとできないことだからね」

しゃあしゃあと言うアズィーズに庸は目を剥いた。

「おや。庸が照れてしまったらしいよ。口も聞けなくなってしまったらしい」

そう言いながら、アズィーズは庸の手を取って指先に口づけた。さらによこしてくる流し目が色っぽくて、うっかり胸をときめかせてしまう。

本当にこういうところは嫌になるほどかっこいい。

「あー.....もう.....」

反論は無意味だ。この際もうどうでもよくなってきた。もうどうにでもなれ、と投げやりな気分にな

る。

「わあ……そうだったのですね。じゃあ父上と庸はすごく仲よしなんですね」

「ああ。だって庸は美人だろう？ こんな可愛らしい人を好きにならないわけがない。そう思わないか？ ルトフィー」

「ええ！ ええ！ とっても。父上と結婚しないのでしたら、ぼくのお嫁さんにしたいです」

「それはダメだ、ルトフィー。まだ結婚していないからといって、私の庸を横取りしてはいけないよ」

「はい、わかりました。庸が母上になってくれるならそれで我慢します」

なんだか二人で勝手なことを言っている。

ルトフィーとアズィーズの会話に入れず庸は苦笑いを浮かべていた。とても五つの子とする会話とは思えない。これが王族というものか。王族はあまり関係ないかもしれないが、色恋のことを五歳の子と話すというのは日本人にはあまりないことなので、ぽかんとしてしまう。

「さ、ルトフィー、庸がお待ちかねだ。もたもたしていると時間がなくなるぞ」

はい！ という先ほどまでのしょげていた顔とは大違いの、はつらつとした子供らしい笑顔でルトフィーは大きく返事をした。

うとうととしていて、隣にアズィーズが座ったのにも気づいていなかった。

ジェットコースターにでも乗せられているかのように、スピーディーな展開にきっと脳がついていかなかったのかもしれない。

庸はルトフィーが自室へ戻った後、ソファーにぐったりと体を横たえていた。

あれから結局、庸はアズィーズ親子と一緒に夕食までとったのだった。ルトフィーは迷い込んで来たときは打って変わってご機嫌になって帰っていった。

「疲れたか」

アズィーズの声が聞こえ、庸は目を擦りながら「少し」と答える。

「今日はすまなかった」

「なんのこと？」

「ルトフィーのことだ」

「ああ。まったく、ああいうことは早く言っておいてくれないと。俺はフィアンセなんですよ。なりきるならしっかりやりたいから」

庸がそう言うと、アズィーズは苦笑した。

「そうだな」

「っていうか、びっくりしただけ。あなたが子持ちだったなんてね。奥様は？」

妻帯者と関係するのはもう嫌だと思っていたのに、また妻帯者とはね、といささかうんざりしつつ聞く。

「いないよ。私は独り者だ」

アズィーズが庸の手を握りながら答える。

独り身と聞いて、心のどこかでほっとする。妻がいて当然とだけ思っていただけに、嘘とはいえ自分が彼のフィアンセであることになんとか甘やかさを覚えてしまった。

だが、そうなるか……。

「え？　じゃあ、ルトフィーのお母さんって……」

離縁か、あるいは――亡くなったか。

「いない」

アズィーズの返答は、ルトフィーの本当の母親が亡くなっているというように聞こえた。

「じゃあ……亡くなった、って……こと？」

おずおずと遠慮がちに聞くと、彼は「まあ、そういうことになる」と返事をよこした。

そうか、と庸は悪いことを聞いてしまったかも、と聞いたことを後悔する。

「気にしなくていい。あれもそれはちゃんとわかっている」

五歳という年のわりにときおり大人びた答え方をするルトフィーを思い出す。いくら周りには彼を気遣うたくさんの大人がいても、あの年ならまだ母親が恋しいだろうに。

「もう――ルトフィーのことはいいだろう？」

考え込む庸のこめかみにアズィーズの唇が触れる。

「それって妬いてるの？」

先ほどの親子の会話を思い出し、庸はクスクスと笑う。

「私は自分のものをたとえ息子にでも取られるのは嫌でね」

アズィーズが首筋に指を這わせてくる。ピリ、と微かな刺激が皮膚に走った。

「……んっ」

不意のことで思わず声が漏れる。

「感じてるのか」

笑いを含むような声で聞かれ、庸は「別に」と素っ気なく答えた。

「素直じゃないな」

首筋に唇が下りてくる。

「あなたこそ、そんな触り方して。抱きたいなら抱きたいって言えば？」

にやりと笑うと「抱いて欲しいくせに」と返ってきた。

「俺はあなたのフィアンセなんでしょ。好きにすればいいですよ」

「可愛くない」

アズィーズが肩を竦めるのを見て、ふふっ、と庸が笑う。

「嫌ならさっさとお役御免にしてくれていいですよ。――あなた、結構物好きですよ。俺を放り出したところであなたにデメリットなんかないのに。むしろここに置いておく意味ってあるの？」

「あるさ。ルトフィーがすっかり懐いた。それにおまえの体はいいと言っただろう？　顔も好みだ」

「そりゃ光荣――うわっ」

言うや否や、アズィーズは庸の体を抱きかかえた。

「ちょ……！ な……っ！」

「行くぞ」

しっかりとアズィーズの腕に抱かれた庸の体がふわりと宙に浮く。いくら細身といっても庸は男だ。その男の体を軽々と抱き上げている彼の力は相当に強いのだろう。

「ど、どこに行くって……！」

「どこって、決まっているだろう。日本人は風呂が好きだと聞いた。きつとこの風呂も好きになるだろうよ」

庸を抱きかかえたアズィーズが部屋を出て行こうとすると、ラウーフが慌てたように駆け寄ってきた。

「殿下、庸様はたいそうお疲れでございます。くれぐれもご無体なことはおやめくださいませ。ただでさえ、このように細くていらっしゃるのです。無理はなさいませんよう」

ラウーフが小言のようにアズィーズに言うと、彼は「わかってる」と一笑に付す。

「心配するな。俺も弁えている」

「風呂くらいひとりで入れますよ。というか、いちいち抱きかかえてくれなくてもいいのに。歩いて行けますから」

すっかり気持ちなど置き去りにされ、アズィーズの言うがままだ。ささやかな抵抗を試みたが、ふんと鼻で軽く笑われただけだった。

「好きにすればいいと言ったのはおまえだよ。私は愛するフィアンセと一緒に風呂に入りたいだけなのだが？ それにおまえひとり抱きかかえられないような男ではおまえも頼りないだろう？」

墓穴を掘ったと庸は思ったが、逞しい腕に抱かれると、イスタンブールで抱かれたときとは違う別のものを感じ取る。例えば、体臭の中に混じる乾いた砂の匂い。こんな匂いは、日本には存在しない。この国独特の、そしてアズィーズの匂いだ。

作品の詳細や最新情報はダリア公式サイト「ダリアカフェ」をご覧ください。

ダリア公式サイト「ダリアカフェ」

<http://www.fwinc.jp/daria/>